

韓天壽『岡寺版集帖』の研究 2

——子集帖・曹全碑についての考察——

上小倉 一志

一、はじめに

韓天壽『岡寺版集帖』については、前稿¹⁾で集帖の内容に関する調査報告をした。韓天壽(一七二七—一七九五)は日本における集帖制作の第一人者であり、江戸中期のわが国でいち早く中国歴代集帖の姿を再現した人物である。当時、日本へ舶載された『淳化閣帖』・『玉煙堂帖』・『停雲館帖』などの名集帖といわれるものに収められている内容は、二王(王羲之・王献之)が中心となっており、歴代皇帝書や唐四大家・宋四大家の書がそれに続く形で取り上げられている。このような形式で収録されている集帖は非常に多く、宋・明・清代の集帖の大半がそうであると言っても良いであろう。

『岡寺版集帖』もこの形式に習う形で収録されており、親集帖においては『汝帖』・『玉煙堂帖』・『渤海堂真帖』・『快雪堂法帖』・『寶賢堂法帖』・『停雲館帖』・『淳化閣帖』・『戲鴻堂法帖』・『寶晋齋法帖』といった著名な集帖を原帖として作られていることが記されている。また、子集帖には原帖とした集帖名こそ記されていないが、形式的には親集帖同様、王羲之・唐四大家中心の形となっている。

しかし、ここで注目すべきは宋・明・清代の集帖では全く収録さ

れていなかった隸書碑を、『岡寺版集帖』子集帖では収めていることにある。ここに収められている隸書碑は次の三種類である。

唐	華嶽精享昭応碑(七一三—七四二年刻)	子集帖・第一
漢	曹全碑(一八五年刻)	子集帖・第二
唐	石臺孝經(七四五年刻)	子集帖・第三

これら隸書碑の中でも特に曹全碑に関しては、江戸中期の日本において書学者の間に、これを初めて知らしめたのが『岡寺版集帖』によるものであったことはよく知られている。そして、この曹全碑が韓天壽の名を高めたといっても過言ではない。本研究では『岡寺版集帖』子集帖に刻されている曹全碑に注目し、刻入された曹全碑の原本となった拓本の時代的な特定や、子集帖における韓天壽の関与について考察するものである。

二、曹全碑の舶載

曹全碑は漢碑の中でも最も良く知られている代表的な石碑である。この原石が発見されたのは明の萬曆年間(一五七三—一六二〇)で、陝西省郿陽県で出土し、陝西省博物館に移された後、現在は西安碑林第三室に置かれている。出土時の初拓本は二本あり、一本は沈韵初の旧蔵本であったが現在は上海博物館が蔵している。もう一本は

陸恢が旧蔵していたようであるが、現在は所在不明である。

日本へ舶載されたものとしては、寛政十二年(一八〇〇)に長崎へ渡った四本が原拓^{はらたく}としては最初であったとされている。この四本のうち一本は木村兼葭堂が入手し、一本は享和二年(一八〇二)に屋代弘賢が手に入れている。しかし、これ以前においてわが国で見ることができた曹全碑は韓天壽『岡寺版集帖』に収められたものであった。

曹全碑が収められていた韓天壽の集帖に関しては多くの研究者が『醉晋齋法帖』であるとしているが、前稿^{ぜんこう}でも取り上げたように『醉晋齋法帖』とは『近代著述目録後編』に記載のある二十四種類^{しゅうしゆ}を刻帖としたものであり、『岡寺版集帖』とは内容的にも全く別のものである。三井文庫の蔵書を記した目録にある曹全碑(韓天壽模刻)には「子集帖 卷二」の記述があり、このように親集帖・子集帖・孫集帖・曾孫集帖と区別されているのは、やはり『岡寺版集帖』に見られる特徴である。

ここで曹全碑の日本への舶載状況を、当時、日本で唯一、大陸との交流窓口として開かれていた長崎においての物流状況を記した次の資料^{しりょう}によって検証してみる。

『齋來書目』・『大意書』・『書籍元帳』・『直組帳』・

『見帳』・『落札帳』・『船舶載來書目』

これらの資料中で曹全碑の舶載が記されているのは『書籍元帳』に二件、『船舶載來書目』に一件とわずかに三件記されているだけである。それぞれの舶載年は次のとおりである。

・ 曹全碑 一部一帖 明和二乙酉年(一七六五年)

船舶載來書目

・ 曹全碑 一部一帖 未四番船 (一八四七年)

(四四)

・ 曹全碑 一部一帖 申四番船 (一八四八年)

嘉永二年酉歲五月書籍元帳(一八四九年)

これらの資料で見える限りでは寛政十二年(一八〇〇)に長崎に渡ったとされている原拓四本の記録が見られない。さらに『船舶載來書目』には、それ以前の明和二年(一七六五)に曹全碑が渡ってきていることが記されているが、この資料だけでは明和二年に舶載されたものが原拓であったかどうかを確認することはできない。しかし、それが原拓であろうと翻刻であろうと、実際に曹全碑の姿を伝えるものが明和二年(一七六五)の段階で日本へ伝えられていたことは確かである。

三、『岡寺版集帖』子集帖への刻入

『岡寺版集帖』は親集帖(十卷)・子集帖(十卷)・孫集帖(十卷)・曾孫集帖(七卷)に分けられており、曹全碑は子集帖に収められている。『岡寺版集帖』が曾孫集帖まで全て完成した時期に関しては不明であるが、親集帖・子集帖についてはそれぞれ巻末に跋文が刻されていることから、おおよその完成時期を推測することができる。親集帖の巻末にある跋文は、韓天壽・釈大寂・長井槐齋^{けいさい}の順で刻されており、落款には次のような年号が記されている。

安永五年丙申夏六月 韓天壽識

(韓天壽跋文)

安永元年庚子歲三月釈大寂識

(釈大寂跋文)

庚子仲秋槐齋長環題

(長井槐齋跋文)

ここで釈大寂の跋に「安永元年庚子」とあるが、安永元年の干支は壬辰あり、跋文が刻されている位置から判断しても「安永元年庚子」は「安永九年庚子」の誤りであると思われる。そして、この安

永九年（一七八〇）が親集帖の完成時期ではないかと考える。

しかし、韓天壽の跋文と他の二人の跋文が書かれた年代には四年の開きがある。これに關しては、韓天壽の跋文の内容に注目したい。寿嘗所鈎摹諸碑、不下三十本、往々刊布于世、其余雜帖未暇纂、而命工大寂上人有意于此、因拳篋筭以応之、佗日或増益之、而卒其業乎、是寿之志也、亦後世好事者之幸也哉

このなかで韓天壽は、既に三十本余りの碑帖を雙鈎して自ら刻しており、その余りの雜帖を積大寂に刻させたとしている。おそらく韓天壽が自ら雙鈎した数多くの碑帖のうち、現在『醉晋齋法帖』とされている二十四種を自分で刻し、残ったものを積大寂に刻させて『岡寺版集帖』親集帖としたものと思われる。つまり、韓天壽が跋文を書いた安永五年（一七七六）は、自ら『醉晋齋法帖』として刻した雙鈎の残りを積大寂に渡した年であり、これを積大寂が四年の歳月をかけて『岡寺版集帖』親集帖として完成したのが安永九年（一七八〇）であったと考える。

子集帖の巻末にある跋文は、友人の度会正令と積大寂のものであり、落款にある年号には次のように記されている。

寛政戊午十月朔日友人度會正令拜撰并書（度会正令跋文）

寛政十年戊午十一月 釋大寂撰（積大寂跋文）

これから跋文の年号から判断すると子集帖の完成時期は寛政十年（一七九八）であったことがわかる。韓天壽は既に寛政七年（一七九五）に没していることから子集帖の完成は韓天壽の没後であったことになる。さらに度会正令の跋文の中に次のような箇所が見られる。

……繼松密寺大寂公與韓為翰墨之友韓嘗以積年所貯摹本數種屬公而使續其緒韓沒後所就集古帖二十本皆是韓摹而鐫也……この跋文の内容からも、韓天壽が雙鈎したものを積大寂が板木に

刻して『岡寺版集帖』子集帖として完成したことが伺え、子集帖が韓天壽没後の完成であってもなんら不思議のないことである。

このことから『岡寺版集帖』子集帖に刻入されている曹全碑は、子集帖完成の寛政十年（一七九八）以前に入手した原拓または翻刻をもとにして雙鈎されたものでなくてはならず、さらに韓天壽が雙鈎したものであるならば、当然、寛政七年（一七九五）以前でなくてはならない。

以上からすると韓天壽は寛政十二年に長崎へ渡ったとされている原拓より前に曹全碑を入手していたことになり、それが『商船載來書目』に記載のある明和二年（一七六五）舶載の曹全碑であったことは十分に考えられることである。この件に關して中西慶爾氏も『岡寺版集帖』子集帖の曹全碑が原本としたものは明和の頃に韓天壽が手に入れたものであったろうとしている。

四、『岡寺版集帖』曹全碑の年代考証

『岡寺版集帖』子集帖の曹全碑が原本とした拓本が、いつの時代に採択されたものであるかを方若『校碑隨筆』・王壯弘『増補校碑隨筆』を手がかりとして検証してみようと思う。『岡寺版集帖』の曹全碑と対比するための資料としては次の二種類の拓本を使用した。

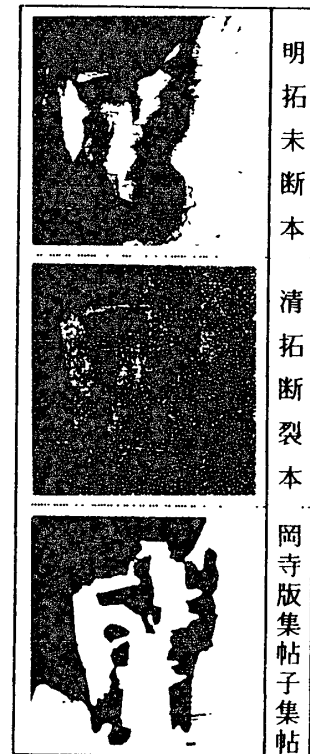
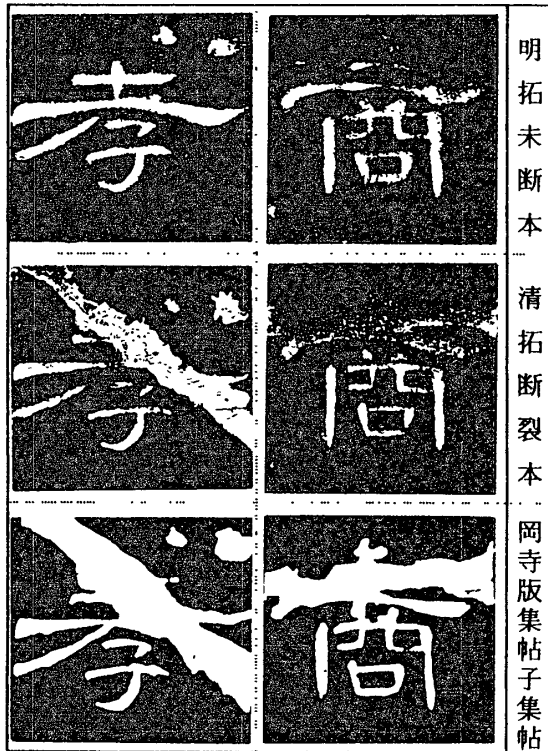
- ・ 明拓未断本 三井文庫蔵（中国法書選8・二玄社）
- ・ 清拓断列本（書跡名品叢刊5・二玄社）

『増補校碑隨筆』中の原文を用いながら『岡寺版集帖』子集帖に刻されている曹全碑の欠損状況を確認する。

① 出土時初拓本、首行末「因」字未損、称城外本。
明拓未断本・清拓断裂本・岡寺版集帖の何れも「因」字が欠損しており出土時初拓本ではない。この「因」字の欠損は原碑を城内に

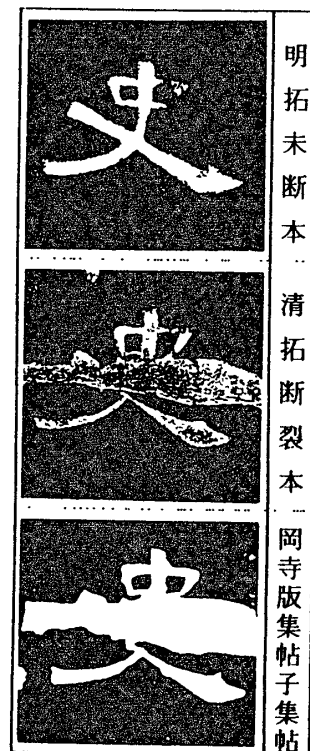
移す際に破損したものである。

② 明末時大風折樹壓碑、自首行「商」至十九行「吏」断列一
道。



明末の台風によって樹が石碑に倒れかかり横断したもので、第一
行の「商」字から第十九行の「吏」字まで亀裂が入った。ここに上
げた三箇所の文字によってその様子が判断できる。明拓未断本に見
られない亀裂が、清拓断列本・岡寺版曹全碑にははっきりと見るこ
とができる。

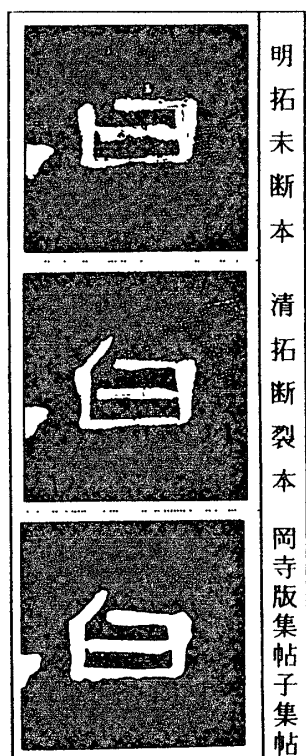
③ 断後最初拓本、十八行「臨」字雖當裂道、然右下二「口」、
字劃皆無損、「貢王庭」之「王」字完好。





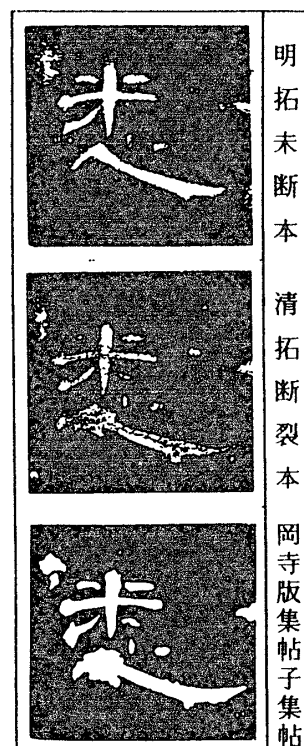
岡寺版曹全碑「臨」字の右下「口」部分が若干残ってはいるものの「王」字に欠損が認められることから断裂直後の拓本ではない。

④ 明末清初洗碑後拓本、「日」字即 成「白」字。



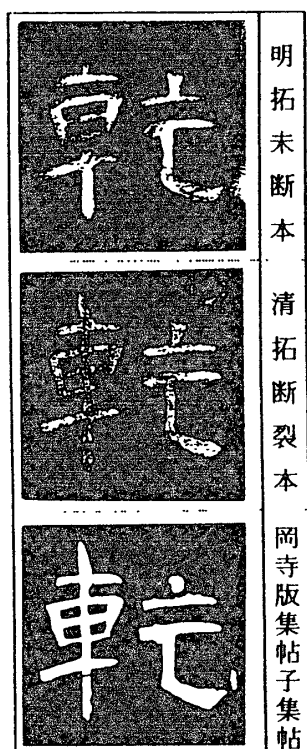
岡寺版曹全碑でも「日」字が「白」字のように欠損した後が見られ、明末から清初において破損した後に採択されたものを雙鉤したといえる。

⑤ 此碑康熙間損「悉」字。



清拓断裂本及び岡寺版曹全碑の「悉」字「心」部一画目と二画目の間が欠損している。これは康熙年間（一六六二年～一七二二年）に破損してしまったものであるから、これらはそれ以後に取られた拓本である。

⑥ 乾隆間損「乾」字。



乾隆年間（一七三六～一七九五）に「乾」字が欠損している。これは乾隆の年号を避ける為のもので清拓断裂本・岡寺版曹全碑ともに「乾」字左部分が「車」に削られている。

⑦ 嘉道間損「學」字(十六行「庶使學者」「學」字末筆損)。



清拓断裂本・岡寺版曹全碑のいずれにも「學」字の欠損が見られる。つまり、これらが嘉慶・道光年間(一七九六―一八五〇)に破損した後に採択されたものであるといえる。

⑧ 咸同間損「月」字(十行「七年三月」之「月」字中泐)。



咸豊・同治年間(一八五一―一八七四)に「月」字の中を欠損している。清拓断裂本にはこの欠損が見られるが、岡寺版曹全碑には見られない。つまり、岡寺版曹全碑は咸豊・同治年間以前に採択さ

れたものを原本として雙鉤されていることになる。

⑨ 光緒民國間損「遷」字(二行「遷于」之「遷」字右點挖成直劃而下)。



光緒・民國間(一八七五―一九四八)に「遷」字右の點に欠損が見られる。清拓断裂本にはこの欠損が見られるが、岡寺版曹全碑では見ることができない。

以上が『増補校碑隨筆』に記されている曹全碑の欠損状態と『岡寺版集帖』子集帖に刻入されている曹全碑を、明拓未断本・清拓断裂本の状況と比較しながら検証してみたものである。その結果として『岡寺版集帖』子集帖の曹全碑が原本としたものについて次のようなことが言える。

- ・ 石碑が断裂した後に取られた拓本であるが、断裂直後の拓本ではない。

- ・ 嘉慶・道光年間(一七九六―一八五〇)においての欠損箇所は確認できるが、咸豊・同治年間(一八五一―一八七四)における欠損箇所は確認することができない。

つまり『岡寺版集帖』子集帖に刻入されている曹全碑は嘉慶・道

光年間に取られた拓本を原本としていることになる。さらに板木に碑文を刻する際、わざわざ行間に細く罫線のようなものを刻している。これは原本の姿を忠実に再現したものと考えられ、このような罫線が入るのは拓本が既に剪装本の形を取っていたことに他ならない。



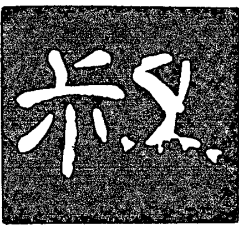
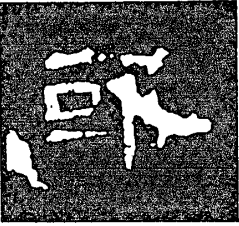

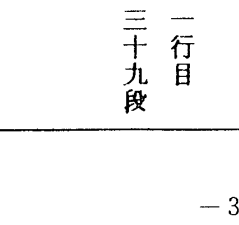
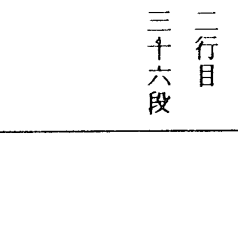

『岡寺版集帖』子集帖の曹全碑

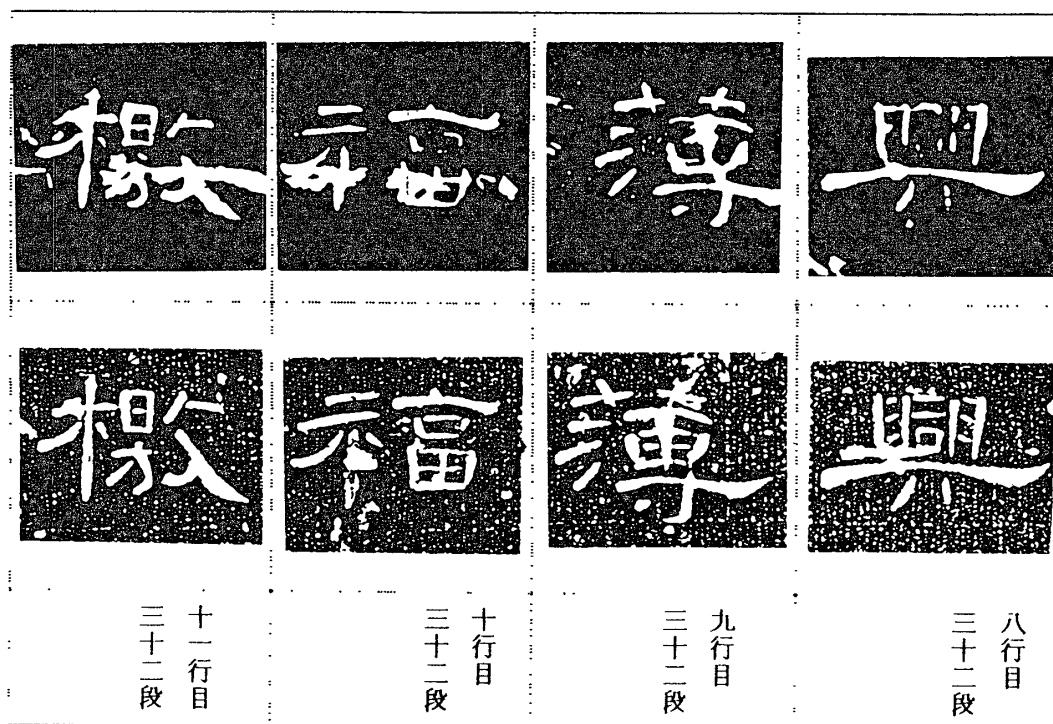
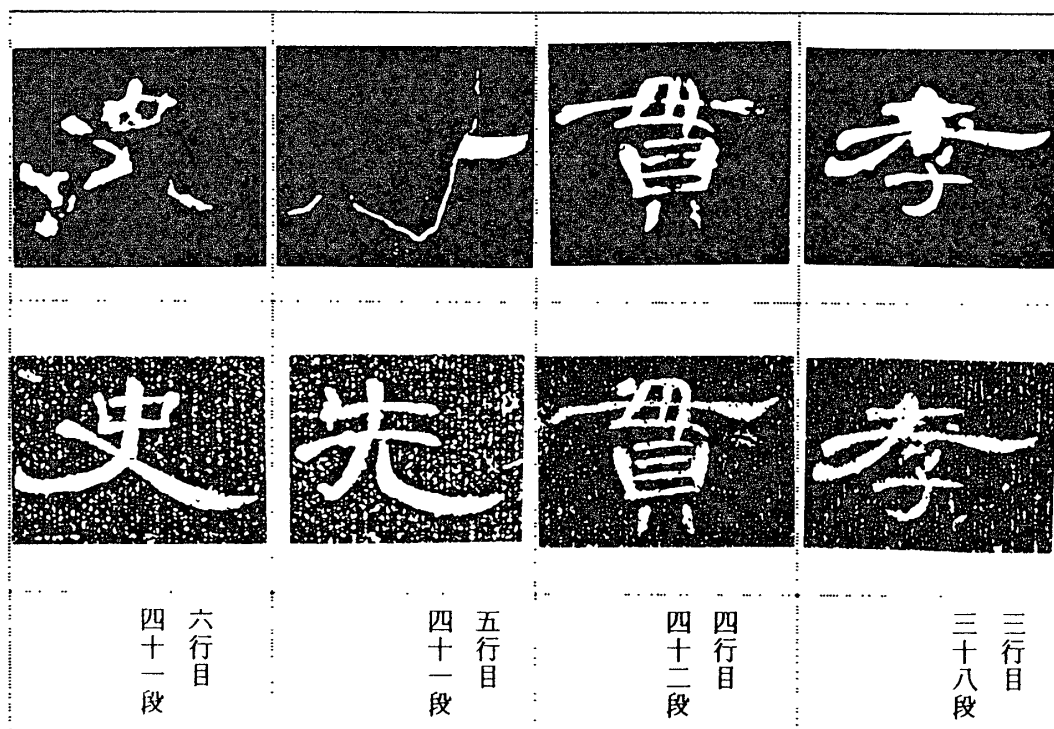
しかし、原本として使用された剪装本が、嘉慶・道光年間（一七九六～一八五〇）以降のものであるとすると矛盾が生じてくることになる。もし、韓天壽自身が曹全碑の雙鉤を行なったとするならば、彼の存命中でなくてはならないことになる。しかし、韓天壽は寛政七年（一七九五）に没しており、嘉慶・道光年間に欠損した「學」字を雙鉤することは不可能である。韓天壽の雙鉤でなかったと仮定した場合も、『岡寺版集帖』子集帖が完成したのが寛政十年（一七

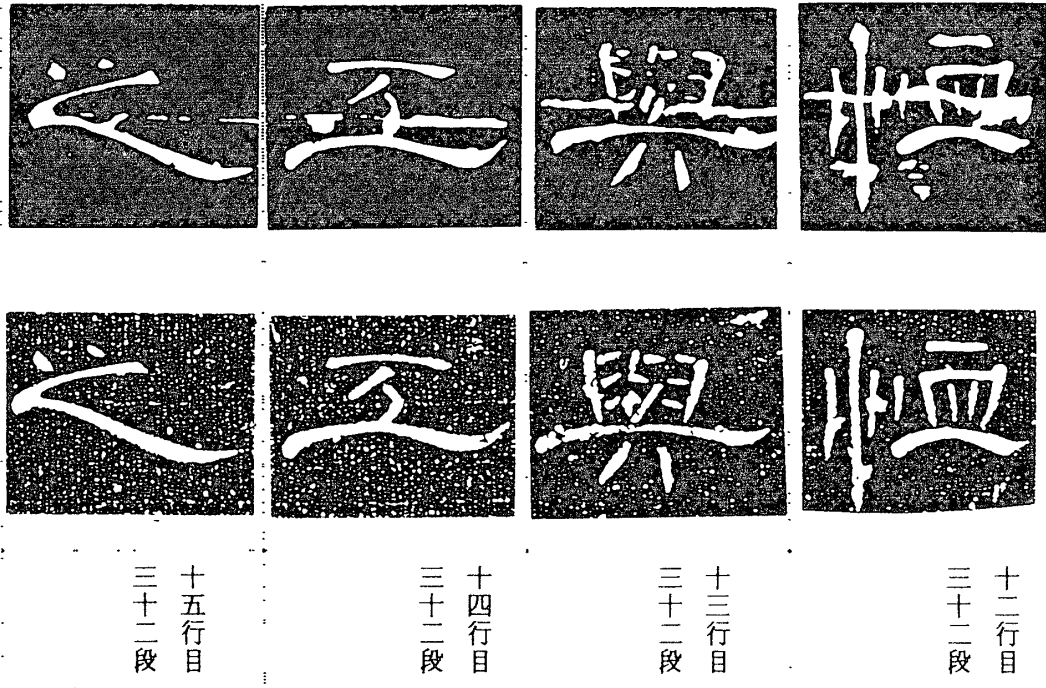
九八）であることから現実的には不可能である。さらに前章で触れた、韓天壽が曹全碑の原本を入手したのが明和の頃であったとする中西慶爾氏の見解も有り得ないことになるのである。

五、他の欠損状況

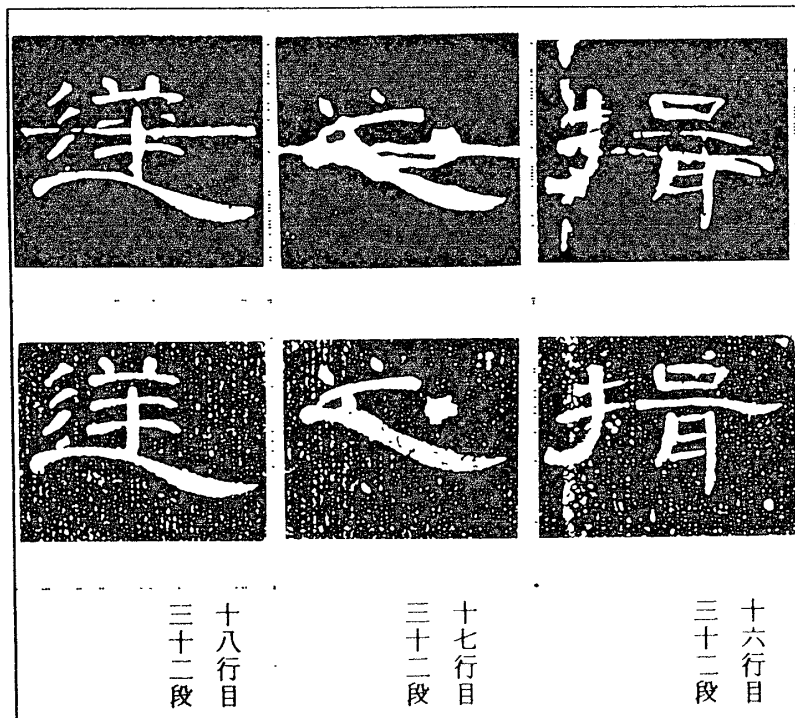
『増補校碑隨筆』に記されている欠損状況は先に上げたとおりであるが、『岡寺版集帖』子集帖に刻入されている曹全碑には他にも幾つかの欠損箇所が見られる。近拓の曹全碑拓本と比較して原石の欠損ではないものを抜き出した。しかし、剪装本にした段階で筆画の先端が切れてしまったと考えられるものは除いて取り上げることにする。（行数・段数は整本の状態においてのものである。）

『岡寺版集帖』子集帖		近拓曹全碑	行・段
			一行目 三十九段
			二行目 三十六段





これら原石には無い欠損は整本の状態で考えた場合、全てが三十二段より下に見られる。曹全碑は一行が四十五段からなっており、碑の下三分の一に欠損が集中していることになる。さらに、八行目三十二段「興」字から十八行目三十二段「逆」字まで横一列に十一文字（八行目「興」字・九行目「簿」字・十行目「福」字・十一行目「檄」字・十二行目「恤」字・十三行目「與」字・十四行目「工」



字・十五行目「之」字・十六行目「揖」字・十七行目「之」字・十八行目「逆」字が欠損している。

この十一文字に見られる欠損の様子は「興」字・「簿」字については文字中央部分に欠損が見られるだけであるが、「福」字から「逆」字までの九文字には文字中央を通り抜ける様に走る亀裂のような痕跡がはっきりと見られる。これは『岡寺版集帖』子集帖が完成してから後で板木又は集帖に付けられた痕跡ではなく、韓天壽が原本として使用したのに見られた欠損箇所を忠実に雙鉤したものである（ここでは韓天壽が曹全碑を雙鉤したものと仮定して考える）。何故なら『岡寺版集帖』のように剪装本の状態では、これらの欠損箇所はまったく別の位置に分散しており、同時に破損することは不可能である。つまり、三十二段目に見られる十一文字の欠損は整本の状態でなくては付けることができないものである。しかし、先にも述べたように原本とした曹全碑は既に剪装本であったと考えられ、さらにそれ以前の段階で拓本に着けられた傷跡であると判断される。

また、五行目四十一段「先」字と六行目四十一段「史」字は整本の状態で隣り合って位置している。「先」字は右波磔部分を若干残しているだけで左側は全く無くなってしまっており、「史」字は右下方への波磔をかなり失っていることから、この部分も整本の段階で破損してしまったものと考えられる。

さらに、「先」字でわずかに確認できる波磔の先端部分の位置が、前後の文字の位置から判断しても上に大きくずれてしまっている。このように大きな字間のずれは『岡寺版集帖』の曹全碑で他には見られないことや、「史」字の「口」部分が原拓に比べ小さく不自然な形になってしまっていることから、原本とした剪装本が原拓では

なく、これらの部分を破損している拓本を元に作られた翻刻^{注12}によるものであった可能性もあると思われる。

一行目三十九段「叔」字波磔先端の欠損・二行目三十六段「咸」字上部の欠損・三行目三十八段「孝」字中心部の欠損・四行目四十二段「貫」字波磔先端の欠損は、整本の状態ではきたものか剪装本になってからのものであるかは不明であるが、原石には見られない欠損であることは確かであり、『岡寺版集帖』子集帖に刻入する際に原本としたものに既に見られた欠損であったと判断する。

六、『岡寺版集帖』子集帖と韓天壽の関係

まず、『岡寺版集帖』子集帖と韓天壽の関係についてまとめる前に、ここまで検証してきた中で韓天壽と関係が深い主要事項を年表にして表わすと次のようになる。

『岡寺版集帖』親集帖については韓天壽存命中に完成していることや、彼自身の跋文から判断しても元になった集帖を雙鉤したのが韓天壽であったことは間違いないと考える。それを釈大寂が板木に刻して完成したものである。

子集帖については韓天壽没後の完成ではあるが、先に記した度会正令の跋文によると韓天壽が生前に雙鉤しておいたものを釈大寂が板木に刻したとしている。しかし、今回曹全碑において検証しただけでも、原本とした剪装本が韓天壽存命中に採択されたものではないことが判明しており、『岡寺版集帖』子集帖の曹全碑は彼が雙鉤したものとする定説に矛盾するものになっている。だが、集帖を刻した釈大寂の雙鉤技術が韓天壽に匹敵するものであったとも考え難い。もし彼が雙鉤したのであれば、親集帖の続編として子集帖を作った意味が無く、それほどの雙鉤技術が釈大寂にあったとすれば、自

西 曆	主 要 事 項 (年 度)	
1700	曹全碑原石発見(明・萬曆年間「五七」一六〇)の初年	「悉」字欠損 岡寺版集帖に見られる 曹全碑の欠損と時期
1750	韓天壽生誕(一七五)	「乾」字欠損
1800	親集帖完成(一七〇) 韓天壽没(一七五) 子集帖完成(一七九) 曹全碑原拓舶載(一八〇) 『岡寺版集帖』曹全碑の原拓が 採択された時期(一八六―一八五)	「學」字欠損
	曹全碑舶載の記載(一七五・『南舶來書目』)	

らのオリジナル集帖として世間に発表しているはずだからである。また、その他でも『岡寺版集帖』に携わった人物の中に雙鉤を巧みにしたとされる人物は見当たらない。

集帖に刻されている文字について、韓天壽雙鉤の親集帖と今回問題にしている子集帖の曹全碑を比較してみると、雙鉤技術に遜色は見られない。まして、曹全碑の結体や用筆法、石碑の摩滅箇所に至るまで忠実に伝えており、当時の日本においての漢碑の資料としてはかなり完成度の高いものであったと思われるほどである。このように韓天壽と『岡寺版集帖』子集帖に刻されている曹全碑の関係には年代的に矛盾した点があり、子集帖全体への韓天壽の関与についてもかなり疑問であると言えるが、韓天壽以外にこれらの碑帖を雙鉤したといえる人物が見当たらない限り全く無関係であったと断定することはできない。

七、結び

以上、韓天壽『岡寺版集帖』子集帖に刻されてる曹全碑に関して調査し、『増補校碑隨筆』を頼りに明拓末段本・清拓段裂本・近拓本と比較しながら、その欠損状況から原本とした拓本の年代や装丁の様子を検証してみた。それによって子集帖と韓天壽の関わりについて定説とされていたものとは矛盾する結果が出るようになったが、子集帖の完成度は韓天壽が雙鉤した親集帖にけっして劣るものではなく、漢碑に馴染みのなかった当時の日本において『岡寺版集帖』子集帖の曹全碑の姿はかなり衝撃的なものであったと思われる。

このように年代的な矛盾や、韓天壽の関与についての疑問に関係なく『岡寺版集帖』の曹全碑が江戸中期の日本国内で書学者に与えた影響は大きかったと言えよう。

《注》

- 注1 「韓天壽『岡寺版集帖』の研究」(『名古屋女子大学紀要』第四十二号 人文・社会編 平成八・三) 参照
- 注2 原石から採択した拓本をさす。
- 注3 前掲注1 参照
- 注4 中田勇次郎『日本書道の系譜』(木耳社 昭和45・9)
- 注5 大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所研究叢刊一 昭和42・3) 参照
- 注6 釈大寂(一七四四―一八一)は、岡寺山繼松寺八世の住職無倪和尚。書道に精通し、その書は韓天壽風であったとされている。岡寺版集帖の出版にも協力し、その刻字にかかわったとされている。
- 長井槐齋(一七三〇―一七八六)は、松坂の医師で書画を巧みにし、岡寺版集帖の出版に際しても資金を援助している。
- 中西慶爾『中国書道辞典』(木耳社 昭和56・1) 参照
- 注7 王装弘『増補校碑随筆』(上海書畫出版社) 参照
- 注8 未段本とは明末の台風によって碑が横断してしまいう前の拓本であり、段裂本とは横断後の拓本を意味する。
- 注9 剪装本とは拓本を学書しやすくするために均一寸法に裁断して製本したものである。
- 注10 整本または套本とは採択したままの形の拓本のことであり、石碑全体の様子を知ることができる。
- 注11 翻刻とは原石が存在するにもかかわらず、再刻したものである。
- 注12